

6-1 地球温暖化

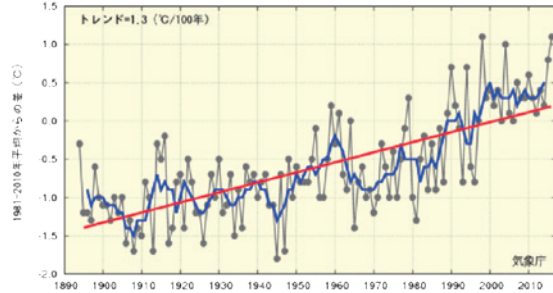
地球温暖化は、人間活動に起因する温室効果ガスの増加が原因であるとは断定されています。しかし、世界の二酸化炭素（温室効果ガスのうち最も代表的なガス）の総排出量は増加を続けています。滋賀県においても年平均気温は上昇し、それによる影響が琵琶湖をはじめ様々な形で現れています。

1. 地球温暖化の現状

産業革命以降、化石燃料を大量に消費してきたことにより、世界の二酸化炭素濃度は、産業革命以前の平均値と比べ約42%増加しています。

大気中の温室効果ガス濃度が高くなると地球温暖化が進行し、年平均気温の100年あたりの変化は、世界では約0.72℃、日本では約1.19℃、県では約1.3℃の上昇となっています（図6-1-1）。

一方、地域の温室効果ガス排出量は、東日本大震災の影響により電気の二酸化炭素排出係数（単位消費電力量あたりの二酸化炭素排出量）が上がったことなどをを受け増加し、2012年度には1429万t-CO₂まで増加しましたが、それ以降は減少に転じています（図6-1-2）。



細線（黒）：各年の平均気温の基準値（※）からの偏差
太線（青）：偏差の5年移動平均
直線（赤）：長期的な変化傾向
※基準値は1981～2010年の30年平均値

図6-1-1 彦根の年平均気温偏差（彦根地方気象台提供）

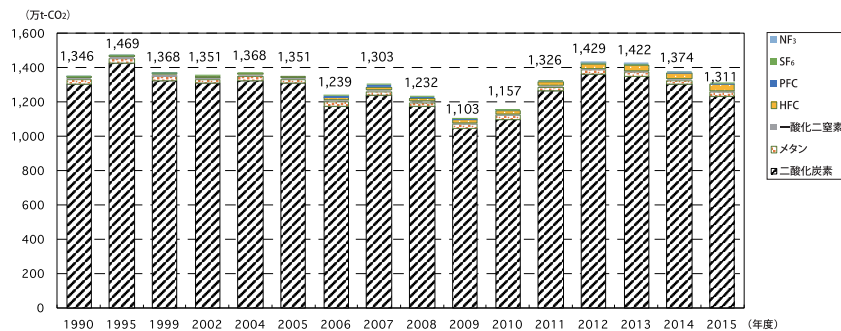
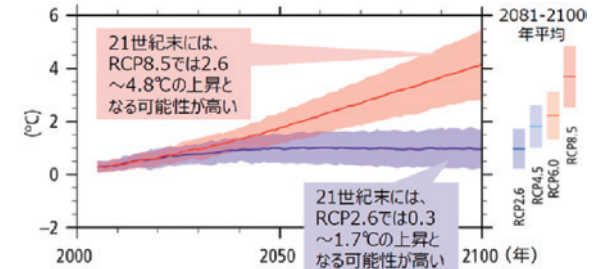


図6-1-2 県域の温室効果ガスの排出状況

2. 地球温暖化の今後の予測

2014年に公表されたIPCC第5次評価報告書には、どのようなシナリオを当てはめても、21世紀末の気温は現在よりも上昇すること、また、シナリオによっては最大4.8℃の気温上昇となることが示されています（図6-1-3）。



※RCPとは「代表的濃度経路」のこと。RCP2.6は2100年の温室効果ガス排出量の最も低いシナリオで、RCP8.5は最も高いシナリオ。

図6-1-3 今後の気温上昇の予測
（出典：環境白書（平成28年版、環境省））

3. 県における地球温暖化の影響



写真6-1-1 大津港のアオコ（2015年11月6日）
県においても、水稻の白未熟粒や胴割粒といった外観品質の低下、県内ではあまり見られなかった南方系のツマグロヒョウモン（蝶）の増加など、地球温暖化による影響が顕在化しています。また、琵琶湖では、暖冬であった2006～2007年と2015～2016年に全循環（P.138ピカ参照）の遅れが発生しています。さらに、通常7～10月頃にかけて発生するアオコが、2015年度には11月の晩秋に発生しました（写真6-1-1）。

4. 地球温暖化に対する動き

2015年にフランスのパリで開催されたCOP21（国連気候変動枠組条約第21回締約国会議）にて、京都議定書に代わる2020年代以降の温室効果ガス排出削減等のための新たな国際枠組み「パリ協定」が採択されるなど、世界的な対応が進められています。県においても、2012年に「滋賀県低炭素社会づくり推進計画」を策定、2017年にはこれを改定し、低炭素社会づくりの実現に向け、必要な施策を総合的かつ計画的に進めています（P.236「10-3」参照）。

温暖化対策課

【IPCC】気候変動に関する政府間パネル。国連環境計画と世界気象機関が設置し、各国の研究者が地球温暖化問題に関する科学的知見をまとめ、地球温暖化対策に科学的基礎を与える公式の場。